

〈研究会通信〉

循環型地域社会をめざす研究会

増田 アツミ (埼玉県/生活文化・地域協同研究会)

地球規模での環境問題が深刻さを増し、また、農業の危機もいわれています。大量生産、大量廃棄型社会から持続可能な社会へくらしの質の転換が求められています。

人々が生産し、消費し、暮らしている顔のみえる地域社会の中でこそ、展望が見えてくるのではないのでしょうか。自然保護、エネルギー問題、農業、まちづくりなどを結んだ協同の可能性による循環型地域づくりを目指す自主研究会として会員有志により発足しました。ほそぼそながら2回の研究会をもちました。

第1回研究会 (準備会を兼ねて)

1994年10月22日 池袋芸術劇場

報告者：木内正敏さん

(自然教育研究センター代表)

木内さんはご自分の仕事との関わりから、いまある自然は人間が維持することで残ってきたもの、とりわけ身近な雑木林は、人の手が加わり活用されることで15～20年のサイクルで維持されてきた。自然保護の先進地であるイギリスでは雑木林の維持、管理のかなりの部分を市民ボランティアが楽しみながら行っている。日本の環境行政は管理の面だけが強調されている。もっと多面的な活用が必要ではないかと話されたうえで、フランスの有機農家が100年ほど前から取り組んでいる、ジャンペーンコンポストの紹介をされた。小枝をチップ状にして畑に毎年積んでいき4年ほどで安定した土壌に変わっていく。庭木や公園の剪定した小枝が活用でき農業と結んで、ゴミ減量のシステムづくりができるのではないかと。

第2回研究会

1995年4月17日 新宿消費生活センター

報告者：飯島信吾さん

(シーアンドシー代表)

産直、運動のもつ意味

—無茶々園の実践から—

以前より全国の産直運動の取材を続けてこられた飯島さんから、主に市民生協の産直運動を中心に、産直、の概念やその経緯、生産者グループの組織形態や特色が話された。そして今、消費者の側に、生協の側に、生産者の側に何が起きているのかといった問題をさぐっていく中から、無茶々園の実践のもつ意味が新たな方向を示しているのではないかと提起があった。——(この内容については、機会をあらためてご報告したいと思います。)

次回は黄柳野高校、設楽町の黄柳野塾の訪問を考えています。

今後2～3カ月に1回の研究会を予定、関心あるかたのご参加をお待ちしています。

呼びかけ人

外谷富二男 (ワーカーズコープ・エコテック、
協同総研常任理事)

増田アツミ (埼玉/生活文化・地域協同研究会)

佐藤 弘子 (協同総研事務局)